

懐かしき我が人生道場 — 川崎医療短期大学時代の思い出 —

佐々木 匡 秀

The Memories of Some Noteworthy Affairs in My Life — As an Establishing Member and Teaching Staff Member of Kawasaki College of Allied Health Professions —

Masahide SASAKI

プロローグ

67年間の馬齢を重ねた今日、行き去りしその昔を振り返ると、人生において最も肝心な成長期とも言うべき30歳から40歳代の半ばまでの足掛け15年間で、川崎病院と川崎医療短期大学で、過ごせたことに心から感謝している。

何よりも有り難かったことは、自分が熟慮に熟慮を重ねて練りに練った案件が、しばしば、故川崎祐宣名誉理事長のお考えと良く一致していたことである。その一つが、医療短期大学の設置であり、医療検査科、医療秘書科の設置構想であった。

川崎学園とのご縁

昭和42年1月1日より、私は縁あって川崎医科大学の前身である川崎病院癌研究所臨床検査科の生化学科長に任じられて赴任した。これは、すべて川崎祐宣先生と恩師故柴田進先生との協議の上決定された私個人の身の振り方であった。寧ろ、私に与えられた医師としての運命と言うより宿命と申したほうが率直な言葉かもしれない。

赴任当時、川崎祐宣先生は“此の頃の医科大学の教授達は実践医学を教える事を忘れ、学生達は医学の本質が何であるかを知らない。川崎病院に勤務する医者で実践的な医学教育をする医科大学を造って見たい。そのために、是非君達の協力が欲しい”と常に申しておられた。そして、幾多の難関を乗り越えられて、昭和45年に戦後初めての私立医科大学を創設されたのである。その苦闘たるや筆舌を持って表現し難いもので

(平成12年12月5日受理)

山口県赤十字血液センター

Yamaguchi Red Cross Blood Center

あるが、当時の医学界にあっては、川崎医科大学の誕生は万人が巻舌驚愕し、一世を風靡したことは事実である。

アメリカ留学の決意

その当時、私は、折角新設された川崎医科大学の臨床検査部を世間にありきたりの検査室に造りあげたのでは、到底、諸外国のそれにはついて行けないと、一人ひそかに悩みはじめた。そこで、私の任務であった新しい検査室の基本設計図を書けたのを機に、付属病院がスタートする前の2年間、アメリカに留学することを決心したのである。そして思い切って、当時、シカゴにあったマイケル リース病院の生化学検査室のDr. サムエル ナテルソンの下に、アメリカ流の臨床検査を学ぶために渡米した。

縁あって、留学中に元フロリダ大学医学部の医学長であったアメリカ医師会のDr. アーサー ニコルソン部長と親しくなれたのである。

一方、川崎祐宣先生は新しく川崎医科大学の教授になられた方々を小グループにして、数回にわたり、アメリカ医学を学ばせるために米国に送りこまれた。その方々を、シカゴでお迎えし、アメリカ医師会の紹介の元にいろいろな医科大学訪問のアポイントを取り、案内をすることが、米国での私の役目の一つになったのである。

短期大学の併設の発想

忘れもしない昭和47年9月、川崎祐宣先生と数人の教授がシカゴに来られ、約20日間、米国の新設医科大学を数ヶ所視察された。その旅の案内役として参加した私に、川崎先生が常日頃先生が胸中で思案をされていた川崎医科大学の将来構想を、色々と話して下さい

たのである。その一つに、“運良く川崎医科大学は設立できた。しかし、これからの医学は医師だけを幾ら養成しても、その下で働く看護婦、検査技師、又、放射線技師等が、真に実力を持たないと、理想的な病院の運営は不可能である。そこで、君に頼みたいことは、そのようなパラメディカルの学生を育成するために、帰国後は力を貸して欲しい”と頼まれた。加えてもう一つ、“君に聞くが、日本の医学とアメリカの医学とはどんな差があるのかね、最も大きく違う点は何だと思ふかね”と聞かれた。

そこで、私はとっさに、“医師の実力は両国間にそんなに大きな差は無いようですが、ただ、大きな違いは秘書制度の充実の差と思われます”と答えた。確かに米国では、殆どの教授や助教授は秘書を雇用しており、雑用は全て秘書が片付けている。したがって医師たちは学生の教育や研究に没頭することが出来るのを、毎日、目の当りに見ていて羨ましい思いをしていたので、率直に申し上げた。川崎先生は、すかさず私に“君にもう一つ頼みがある。実は、日本に帰国したら、ただちに短期大学創りの準備に取りかかるので、その中に、是非、医療秘書科を加えたい。そのために、米国に秘書養成学校がどのくらいあるかを調べて欲しい”と依頼された。

私はさっそく Dr. ニコルソンに川崎先生の計画を伝えて、米国での医療秘書養成学校の数を調べてもらった。そして、彼から一冊の医療秘書科専門学校のリスト集を入手して帰国した。

実は、この冊子が思いがけずも、後で役立ったのである。

一冊のリスト本の功績

昭和47年の10月末日に帰国し、翌日の11月1日から再び川崎病院に勤務し、短期大学の開校の準備に専念した。翌年4月に第一看護科、第二看護科と臨床検査科の三科による新設医療短期大学が誕生したのである。そして川崎医療短期大学は着々と年々充実されて行ったのである。

短期大学が創立して丸2年が経った昭和50年の春、第二看護科が第一回の卒業生を送り出すや否や、川崎先生はすかさず次は放射線技術科と医療秘書科の開講だと、その新しい二学科の開講申請書を、同時に文部省に出すように命令された。短期大学に働く教職員は、故川上清学長を中心に、一同が挙ってこの難事業に当たったのである。難事業というのは、とりわけ医療秘書

科が我国に例の無い新しい学科であるため、文部省も簡単に許可が出せないことは明白であったからである。

申請書を受け取った文部省は、短期大学学科新設審査会議に川崎医療短期大学からの放射線技術科と医療秘書科の二学科の構想を提出した。ところが、審議会から川崎医療短期大学にこの構想に対して直接説明に来るようにと要請が出された。そこで川崎祐宣理事長、川上清学長と私の3名が出頭し、質問を受けることになった。

数多くの質問を受けた中で、最も辛らつな質問は“お茶汲みに、どうして短期大学卒の資格が必要なのか？”であった。当時の私はまだ若かったせいで、思わず“カッ”となり、“米国では秘書はお茶汲みではなく、教授や助教授の仕事の半分ぐらいはこなして彼等を助けている。だから、米国の医学は強いのです。そのような真に役立つ秘書を育成するために、米国には医学秘書の学校が全部で320余あります。”と言って、米国から持ち帰った虎の子の秘書学校リストをその会議に提出した。

会議の流れは一変した。審議委員の方々は、提出したリストの小冊子を交互に目を通された結果、秘書科の教育をどの様に実施するかを、具体的な教育方針を3本の柱に纏めて、教育内容の具体例を提出することと、川崎医療短期大学がこの学科の運営に成功を見るまでは、当分の間、川崎医療短期大学のみ医療秘書科の設置を許可するとされた。勿論のことに、放射線技術科の設置も同時に許可されたのである。

理想の短期大学造り

理想的な短期大学に一步でも近づけようと、川崎祐宣先生の思慮深い、訓導指揮も抜群であったが、川崎医療短期大学の教員や事務員は言うに及ばず、入学してきた学生達も自分達が学ぶ学校は自分達の手で良き伝統を築こうと、みんなで頑張った。近所の人達の学生に関する評判も一日一日と良くなってきた。

とある日、あるバス会社の運転手から私当てる電話がかかってきた。何事だろうか心配しながら受話器を取ると、いきなり“お宅の学校では、学生さん達にどんな躰をしておられるのですか？”との問い合わせの電話である。驚いた私は、“何事か不都合なことでも学生達がしたのでしょうか？”と尋ね返すと、“いや、私も長年バスの運転手をしていますが、お宅の学生ほど、社会道德の行き届いた学生を、最近見たことがありません。余りに良く出来た学生さん達なので、嬉し

くなりお電話をしました”と言う嬉しい電話であった。詳しく内容を聞いてみると、臨床検査科の学生達がその前日研修旅行から帰ってきた。その下車する時に、社内に散らかしたごみの一切を片付けたうえ、拭き掃除までしたとのことであった。

このような美談があちらこちらから聞こえるようになるに連れて、年々、素敵な学生達が数多く入学して来るようになった。その結果、各科とも優秀な学生達が育ち、国家試験も全国で一、二位を競うほどの合格率を出し始めたのである。

勿論、卒後の就職に関しても、あちこちの病院は言うに及ばず、大企業からも、川崎出身の臨床検査や放射線の技師が欲しい、看護婦が欲しい、医療秘書科出の秘書が欲しいと、全国から求人が殺到し始め、これが教師冥利というものかと教職員がみんな喜んでのである。

ところがである。

逆転の発想

あんなにも素晴らしく優秀に育った教え子達が、望まれて就職したにもかかわらず、2～3年もすると、何時の間にか、もとの木阿弥に戻ってしまうのに気が付き始めた。あれだけ手塩にかけて育てたのに、わずか3年も経たずして、ただの普通人と同じ程度に立ち戻るとは――と、教師として、遣るせ無い気持ちになってきたのである。

そこで、色々原因を調べてみると、どうも卒後の職場教育に問題があるように思えてきた。“よし！こ

の推論が正しいかどうかを正すべく、私自身で育てた技師や秘書を使って、卒後教育がどんなに大切なものかを臨床検査界に見せてやりたい！”との野望がむくむくと私の脳裏に台頭し始めた、所謂逆転の発想である。その結果、あれほど可愛がられ、かつ、自由気儘に短大教育企画をさせて頂いた川崎祐宣理事長や川上学長に加えて恩師柴田進先生までも裏切ることになったが、丸8年の短期大学教員生活に終止符を打ち、川崎病院時代を含めると丸14年間もお世話になった川崎学園を去ることにした。そして、昭和56年4月、川崎医療短期大学を卒業したばかりの数名の技師と1名の秘書科の出身者を連れて、検査部の創設のため、新設の高知医科大学へ赴任したのである。

エピローグ

昨年の3月に定年を迎えるまでの18年間、高知医科大学で検査部造りに専念した。そして、パラメディカルの卒後教育とはこうしてやるものだとばかりに、自分達の手造りの検査システムを完成させ、我国は言うに及ばず世界各国にその範を示すことが出来た。お陰で、各国から多くの見学者が、わざわざ高知医科大学まで尋ねて来られるようになった。勿論、文部省からも毎年大勢の視察者があり、その都度ごと、川崎医療短大卒業の技師達を中心にシステム造りをしたことを自慢して来たことを申し添えたい。と同時に、この世に二つとない川崎学園と言う最高の人生道場で、私が若い時代に修行出来たことと、そこを巣立った方々に大変助けられたことに、深く感謝しつつ、筆を擱く。

